

June 2011

# 創造行政

上越市創造行政研究所ニュースレター

上越市創造行政研究所は、平成12年に設置された上越市役所の組織内シンクタンクです。市政における重要課題の解決や理想の構築に寄与し、地方自治体としての政策形成能力を高めるため、総合的・中長期的・広域的な視点による調査研究などを行っています。ニュースレター「創造行政」では、それらの活動の一部を紹介するほか、上越市のまちづくりを考える上で多くの方々と共に共有したい課題等について、当研究所の視点からお伝えします。

Joetsu city Policy Research Unit

## No.22

- ▶ **巻頭記事** 地域経済の構造を踏まえた地域経営を … 1
- ▶ **まちづくりコラム** 今、改めて「観光振興」を考える … 4
- ▶ **データでみる上越** 市内地区間の人口移動 … 6
- ▶ **お知らせ** 平成23年度事業計画 ほか … 8



巻頭記事

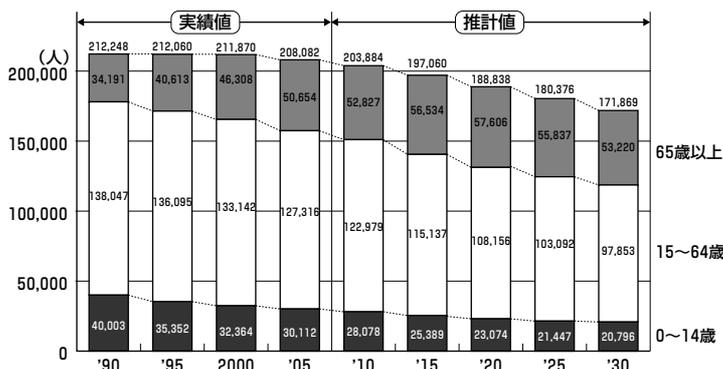
### 地域経済の構造を踏まえた地域経営を

今年度、当研究所では上越市の地域経済構造（お金の流れ）を把握するための研究を行います。実施に先立ち、その経緯や基本的な考え方についての概略をご紹介します。

#### 1 はじめに（地域経済の構造を把握する必要性）

##### （1）人材確保に必要な雇用の場

上越市の人口は、この20年間で1万人近く減少しました。今のペースが続けば、今後20年間で3万人を超える減少が予想されています【図1】。



【図1 上越市の人口の推移（1990-2030）】

資料）国勢調査報告、上越市第5次総合計画をもとに作成

日本全体の人口減少が避けられない厳しい時代ではありますが、将来世代にわたって住みよい上越市をつくっていくためには、一定の人口減少を想定したまちづくりを進めながらも、減少のスピードを緩和し、将来のまちづくりを担う人材を確保していく必要があります。

人材確保の大きなカギを握るのは、やはり働く場の存在です。市内に多様かつ一定量の雇用の場があれば、人がとどまる、戻ってくる、入ってくるという動きも起こります。人口

が増えればその分消費が生まれ、さらに雇用の場が生まれることも期待できます。

##### （2）望ましい地域経済の構築を目指す「政策」の必要性

しかしそう簡単な話ではありません。今や企業の誘致はあろうか、撤退や倒産を防ぐのも困難な時代です。市の経済規模は行政の歳出規模よりも相当大きいため、財政的に支援できることも限られます。そもそもグローバル経済の中で、地方都市にできることは微々たるものという見方もあるでしょう。

とはいえ、地域経済の衰退はいずれ市の存続自体に直結します。将来世代のために地域経済全体を活性化し、雇用の場を確保しようとするれば、各企業・産業で減少した売上を応急処置的に補う経済「対策」だけでなく、そもそも『どのような地域経済の構造が望ましいのか』という地域全体の政策目標を持ち、地域一丸となってその実現に向けチャレンジし続ける姿勢も必要となります。

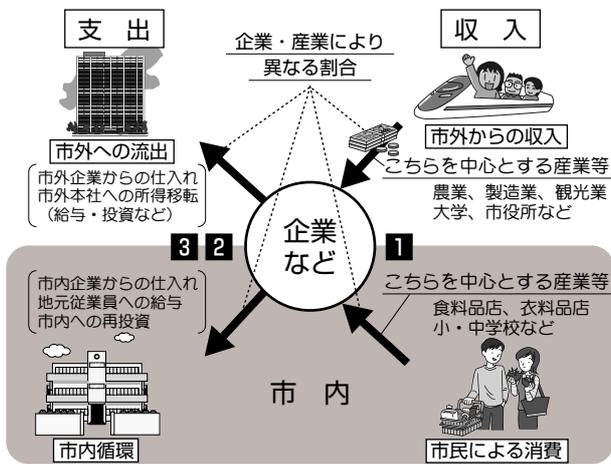
当研究所では、そのための第一歩として、地域経済の基本的な構造を把握でき、政策目標を設定する際の助けとなり、様々な環境変化の影響や取組の効果をだまかに予測できるツール（道具）について考えたいと思います。

#### 2 地域経済の構造のとらえ方

地域経済の構造をとらえる際には、これからお示しすることを基本として押さえておく必要があります。

##### （1）地域に「収入」をもたらす企業、「支出」となる企業

まず、企業(産業)の性質について考えます。すべての企業は基本的に売上を得ていますが、地域を主体に考えれば、地域に「収入」をもたらす企業、「支出」となる企業に分類されます。それは次のようなポイントでほぼ決まります【図2】。



【図2 一つの企業を中心としたお金の流れ】

**1** 商品・サービスの提供先は市内か市外か？

- ▶ 上越市外の人々に商品を提供する企業（外需産業）  
 = 地域にとってお金を稼ぐ役割  
 例：大規模な農業や製造業、観光業
- ▶ 市民に商品を提供する企業（内需産業）  
 = 消費を通じて生活の豊かさをもたらす役割  
 例：食料品店、衣料品店、自動車販売業、教育サービス業

**2** 原材料の調達先は市内か市外か？

- ▶ 地元から調達すれば、お金は市内を循環
- ▶ 市外から調達すれば、お金は市外に流出

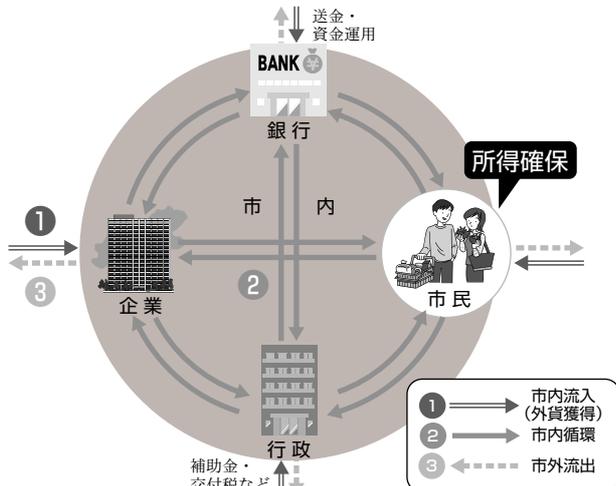
**3** 本社機能があるのは市内か市外か？

- ▶ 地元資本であれば、利益を市内で消費（市内を循環）
- ▶ 市外の大手資本であれば、利益の大部分を本社や競争力の激しい地域に再投資（市外に流出）

どの企業も収支のバランスは保たれますが、お金の流れの市内・市外の比率は企業によって異なることとなります。

**(2) 地域経済全体を取り巻くお金の流れ**

上越市の地域経済は、このような一つ一つの企業が組み合わさって構成されています。上越市には様々な場所からお金が流入し（①）、市内を循環し（②）、最終的には市外へ流出していきます（③）【図3】。



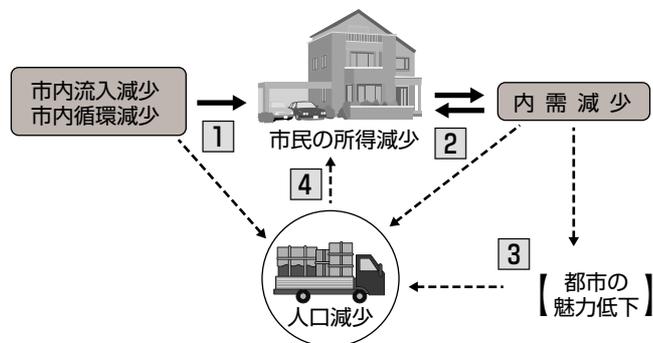
【図3 地域経済全体を取り巻くお金の流れ（イメージ）】

その流れの中で、どれだけのお金を市民の所得として獲得できるかが地域の「雇用力」（養える力）につながります。

もし、市内に入ってくるお金（外貨）や市内を循環するお金の量が減少すれば、

- ① 関連企業の縮小により、従業員は市外に転出するか所得減少（生活に困窮する人が増加）
- ② 所得が減れば内需も減少、内需産業の倒産や撤退などが増加し、従業員は市外に転出するか所得減少
- ③ 内需産業は都市の魅力度や住みやすさに影響するものが多いため、その損失はさらなる転出を促進
- ④ このように人口減少が進めば地域全体の所得も減少となり、以下繰り返しの悪循環となってしまいます【図4】。

一定の雇用を確保し、この悪循環を食い止めようと思えば、外貨獲得と市内循環の促進がポイントになります。



【図4 所得減少と人口減少の悪循環】

**(3) 同じ売上・税収でも異なる地域への影響（事例紹介）**

(1) (2) を踏まえた時に留意すべき点の一例として、工場と商業施設の例を挙げて説明します。

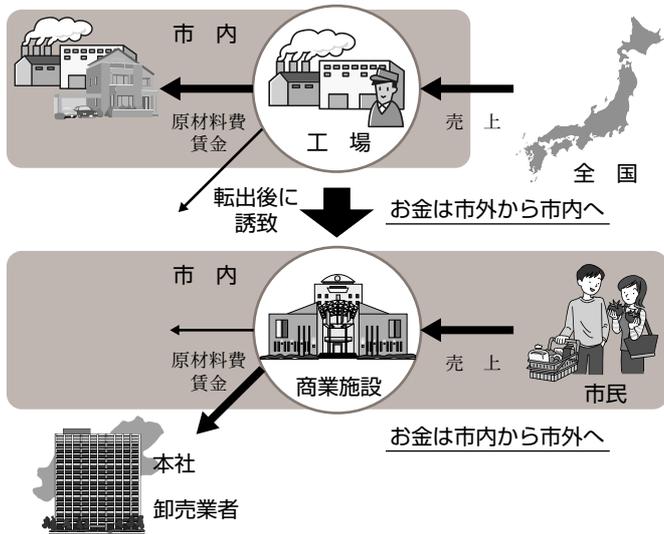
- ▶ 全国に製品を出荷していた地元資本の工場が市外に転出
- ▶ 工場跡地に大手資本の商業施設を誘致
- ▶ 工場も商業施設も売上額や納税額はほぼ同じ

この場合、行政から見れば問題解決のように見えるかもしれませんが、地域経済にとっては全く違う状態になることがあります。なぜなら、

- ▶ 工場は外貨を獲得し、その利益を原材料費や地元従業員への給与、設備投資に充当（お金は市内を循環）
- ▶ 新しい商業施設は、他の商業施設から顧客を奪い、市内で得た利益を本社に移転（お金は市外に流出）

つまり、地域経済全体にとってみれば「収入」の一部を失って「支出」が増えたことを意味します【図5】。

当然のことですが、市外へのお金の流出を抑えようと、ただ大手資本の進出抑制や市内循環（地産地消）を呼び掛けても限界はあります。多くの消費者や企業は、お金を市外に流出するかどうかよりも、その商品が安価であるか、魅力的であるかに関心事があるからです。



【図5 お金の流れの変化（工場→商業施設）】

そもそも、魅力的な商業施設であれば、市民生活の豊かさや都市の魅力度を高めることになり、市民にとっても地域にとっても良い「買い物」をしたと言えるかもしれません。

しかし、地域の「収入」が減ったことで内需が減り、結果的にその商業施設も撤退するようなことになれば元も子もありません。地域の雇用力を維持しようと思えば、別の「収入」を確保するか、他の「支出」を抑えるか、この「買い物」自体を見直すか、何らかの対応が必要となります。

### 3 多様な関係性を生み出す「地域経営」

#### (1) 上越市全体を一つの家族・会社ととらえる

上越市がこれまで「収入」源としてきた農業や製造業、市役所（国から交付税や補助金を獲得）などは、残念ながら今後縮小が予想されていたり、先行き不透明なものが数多くあります。市民が愛着と誇りを持てるような新しい「収入」源を確保しつつ、「支出」の在り方を見直すことも不可避と言えましょう。

しかし、市民の多くが「自分たちが生きている間は大丈夫」、「その先はなんとかなるさ」という楽観的思考であったり、「上越市から転出した子ども達、若者はどうせ戻ってこない」、「上越市の縮小は仕方ない」、「グローバル経済や東京一極集中の前には無力だ」など、将来への希望が感じられないなら、そのような発想は生まれないでしょう。各企業や金融機関、そして行政までもが、身を守るために“パイ”の取り合いや囲い込みに専念しかねません。そのような状態が続けば、なるべくして上越市は沈没してしまいます。

縮小思考の「企業経営」や「行政経営」ではなく、上越市全体を一つの家族・会社ととらえ、皆で協力して地域全体の底上げを図ろうとする「地域経営」の考え方を浸透していかなければならないと思います。

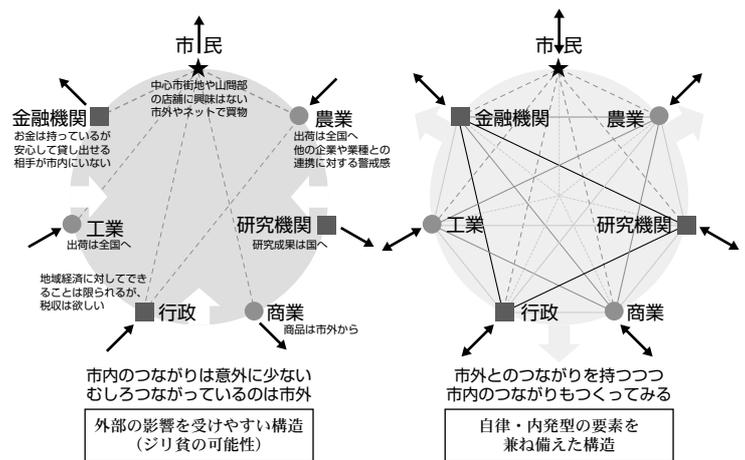
#### (2) 多様な関係性の再構築

まずは、経済界、金融機関、行政などが、地域経済の構造を把握して強み・弱みを探った後に、将来の理想とする構造や雇用力などについて議論しながら目標を設定し、消費者も含めて共有する必要があるでしょう。

現在の延長線上だけでなく、目標から物事を考えようとする時には、異質のものが結びつくことで生まれる創造力、イノベーションが求められます。そのためには、市民一人ひとり・各企業がグローバル社会の中でのネットワークを持ちつつも、ローカルで多様な関係性（つながり）を築きあげていくことが必要になります【図6】。

例えば、次のような関係性が考えられます。

- ▶ 農業、工業、商業の枠を超えた連携（異業種交流、農商工連携）
- ▶ 複数の企業、研究機関、行政の連携（産学官連携）
- ▶ 買い物不便地域における商店や中心市街地への市民出資（消費者と経営者の連携）
- ▶ 地域のお困り事を解決するコミュニティビジネスを促進する融資制度（市民、企業、金融機関の連携）



【図6 経済の視点から見た多様な関係性の再構築】

もちろん、連携は一朝一夕にできません。中には陰で批評したり、競争社会の中で足を引っ張ろうとする人がいるかもしれません。しかし、地域経済が本格的に落ち込んでから取り組もうとしても、企業や行政などの体力がなくなってからでは手遅れであり、結果的に地域全体が沈んでしまいます。

まずは目標を共有でき、仲間として信頼できる範囲から始め、多様なつながりを生み出そうとチャレンジする人、励ます人、それらをつなぐ世話役（コーディネーター）、チャレンジできる環境を整える人などの役割分担の中で、地域全体が大きな目標に向かって力を結集した「チーム」になれば、将来に希望が持てるまちになると思います。

これから行う研究が、上越市の将来を皆で前向きに考え、実践していく一助になれば幸いです。（内海）



No. 3

# 今、改めて“観光振興”を考える



4月29日に「越後上越・上杉おもてなし武将隊」がデビュー！春日山を訪れる観光客のお出迎えをしています。皆さんはもうご覧になりましたか？



これは、NHK大河ドラマの放映などによって全国に知名度が上がった上杉謙信公のふるさととして、上越市の魅力を継続的に市内外に発信する新たな試みです。こうした謙信公を中心にした動きは、このたび市で策定した「第四次観光振興5か年計画」でもプロジェクトの一つに掲げられています。

近年、全国的に観光のスタイルが大きく変わってきていると言われています。そんな今、改めて上越市の観光振興について考えてみたいと思います。

そんな中でも、上杉謙信公は市民が思っている以上に全国的な人気や知名度があって上越市の観光イメージの核になると思うよ。春日山城跡は全国に自慢できる観光エリアになる可能性が十分あるんじゃないかな。実際、大河ドラマの放送があった年には本当にたくさんのお客さんが来だし、謙信公祭も大幅に入込客が増えている。



それから、有名なイベントとして“日本三大夜桜”の高田城百万人観桜会は全国的に知名度が上がっているよ。最近では安定して入込客が100万人を超えているんだ。



それと忘れてはいけないのが、ビジネス客やスポーツ大会への参加者など観光目的ではないけれど上越市を訪れる人が多いのも、市の強みだということ。こうした来訪者にも観光をしてもらうことで、ますます交流人口が増える可能性があるよね。



## そもそも観光振興は何のためにするんでしょう？



今、国も地方も経済が大変な状況だね。観光振興に期待することの一つは、観光客にたくさん来てもらって、地域の経済を活性化させることなんだ。

観光産業は色々な分野に広がりがあって、旅行業や宿泊業、運輸業はもちろん、飲食業や小売業、さらには農林水産業、製造業など多くの産業に経済効果があるとされているよ。

そんなわけで、国は観光庁をつくって観光立国の実現を目指しているし、全国のまちでも観光への期待が高まっているんだ。



## なるほど。でも上越市って観光地というイメージがないんですが…。観光客は来るんでしょうか？



上越市には、海から山に広がる豊かな自然環境や由緒ある歴史の数々といった観光資源になるものがたくさんあるよね。だけど、それぞれが超一流とはいえない面もあるんだ。野球のチームに例えて「ヒットを打てるバッターはたくさんいるけど、ホームランバッターはいない」と言う人もいる。



## 確かにそうですね。けど、名所・旧跡を見るような観光はもう古いと聞いたことがあるんですが…



そのとおりなんだ。謙信公や観桜会は上越市に興味を持って来てもらうための目玉になるとは考えられるけど、それだけで観光が成り立つわけではないんだよ。観光で重要視されるのは、日常生活を離れて普段と違った体験ができるか、その地域の「光」り輝くものを「観」ることができるかどうかってことなんだ。そこで観光地に求められるのは、そこに住んでいる人達の生活空間だったり、生活文化にどう磨きをかけるかってこと。

つまり、上越市民にとって日常の当たり前のことでも、他の地域の人に非日常的で新鮮なことだと思ってもらえたら、それが観光に結びつくということなんだ。「観光資源は“暮らしぶり”」という言葉もあるくらいなんだよ。

例えば、雁木のある街並みや朝市での買い物風景、おいしいお酒や魚、素朴なお菓子、雪とともに過ごす暮らしぶりなんて、上越市民からすれば普通のことだけど、外の地域の人から見れば輝いて見るとよく言われるよ。



今までの上越市は、色んな観光資源があるのに一か所だけしか立ち寄ってもらえなかったり、にぎわうのはイベントの時だけだったり、他の地域の観光地に行くついでに短時間だけしか立ち寄ってもらえないということが多かったんだ。

けれども、人を呼び込む“目玉”と光輝く“暮らしぶり”を紡いで「物語」を描ければ、市内を周遊してもらえるようになったり、年間を通じて四季折々の色んな顔を楽しんでもらえるようになると思うんだ。



**通年で市内を周遊してもらえれば、地域の経済も活性化しそうですね。**



そう。ただ、そこで大事なことは“上越らしさ”を出していくこと。他の地域にはない魅力的な飲食、買い物の機会を提供できれば、きっとみんなから満足してもらえると思うよ。例えば、よく「6次産業化」とか「農商工連携」と言われるけど、上越市で生産される農作物を、地元の工場が上越ならではの商品に加工して、それを地元で売っていくという動きになればいいよね。

こうした地域内のつながりを意識して、色々な業種が関わっていくと、産業の裾野が広がって地域の経済が潤っていくことになるんじゃないかな。(P.1~3巻頭記事を参照。)



**広がりのある取組はこれからの課題ですね。でも観光っていうと一部の企業の人には関係しないイメージがあるんですけど…**



そんなことはないよ。これは、市民一人ひとりにも大いに関係するんだよ。

「上越市にはこんなにいい所、うまいものがあるよ」とか「何にもない所だけとよく来なね」とおもてなしをし、訪れる人に満足してもらえれば嬉しいし、次はどんなおもてなしをしようかと考えるよね。そして満



足した来訪者は、「もう一度来たい」とか「友達にも伝えよう」という思いになってくれる。その繰り返しで、「もっと自分のまちを良くしよう」、「景観にも気を配ろう」、「地域の文化にもこだわろう」という思いになって、自分のまちへの愛着と誇りを育むことにつながると思うんだ。

さらに、そんな思いを持った市民が市外に出た時に、自己紹介のついでに自分のまちを誇らしげに紹介できるようにになれば、全国への発信につながる。市民みんなが上越市の宣伝マンになれば強いまちになるよね。

まちへの愛着と誇りは、まちづくりの最も大切な原動力なんだ。こうして魅力のアップしたまちには再び観光客が訪れ、市民にとっても自慢できるまちになっていく。つまり、観光客への「おもてなし」を考えることで、結果として市民にとって住みよいまち、活気あるまちづくりにつながるということなんだ。

こんな好循環を引き起こすことが、上越市にとって理想的な観光振興なんじゃないかな。



**観光ってまちづくり・人づくりそのものですね。なんだか時間がかかりそう。**



そうだね。さらに言えば、観光的な魅力を持ったまちは、外の人から見た時にも、住んでみたい、働きたいと思ってもらえるまちにもなりうるし、それが新しい産業の立地にも有利になる可能性もあるよね。

確かに時間がかかることだけど、平成27年の春には北陸新幹線が開業する。それまでに上越市が全国から「目的地として選んでもらえる場所」にならないと。一人ひとりが自分に何ができるか考えながら、みんなが力を合わせて“オール上越市”として行動しなければならぬタイミングになっているんだ。



今や日本国中で当たり前のように観光振興が大事だと言われているんですが、「上越市にとって観光って何？」ということをきちんと考え、その意味を少しでも多くの方々と共有することが、まちのパワーにつながってくるのではないのでしょうか。

自分のまちに誇りをもって、外の人に自慢できる。そんな人であふれているまちっていいと思いませんか？ そんな思いで今回コラムに取り上げってみました。(加藤)



# データでみる上越

上越市の統計データに簡単な分析と解説を加え、当市のまちづくりを考えるヒントをお示しする連載コラムです。



No. 4

## 人口（その4） 市内地区間の人口移動

前回のコラムでは、市内地区別の人口増減について紹介しました。今回は、増減の一要素である市内地区間の人口移動について見ていきます。

### ■ 各地区で異なる人口増減の動向

上越市の総人口は、過去5年間（H17.10-H22.9）で約2.3%減少しましたが、地区ごとに見るとその傾向は大きく異なります。特に中山間地域である大島・安塚・牧では減少率が10%を超える一方、中心市街地に隣接する有田・金谷・新道などでは人口が増加しています。

表1ではこの増減内訳を次の3つに区分しました。

- ・市内地区間の移動によるもの〔市内移動〕
- ・市外との移動によるもの〔市外移動〕
- ・出生や死亡によるもの〔出生・死亡〕

【表1 上越市の地区別人口増減（H17.10-H22.9）】

地域区分	地区名	人口 (H22.9)	増減率 (H17-H22)	増減内訳(人)		
				市内移動	市外移動	出生・死亡
中心市街地 (中心市街地を含む地区)	直江津	8,757	-4.1%	-140	-76	-163
	高田	30,726	-4.8%	-394	-690	-505
中心市街地 隣接地域 (中心市街地に 隣接する地区)	有田	14,215	5.8%	216	191	368
	金谷	14,654	3.8%	478	-47	51
	新道	9,177	3.6%	352	-61	27
	春日	21,354	3.5%	379	-335	730
	三郷	1,437	2.6%	59	-14	-8
	五智	10,070	-0.4%	47	-80	-12
	和田	5,870	-2.2%	36	-62	-82
	八千浦	4,311	-3.4%	-68	-21	-64
田園地域等	頸城	9,857	-1.7%	-3	-126	-39
	津有	5,332	-1.9%	-2	-111	10
	大潟	10,171	-2.4%	1	-21	-236
	三和	6,212	-4.0%	-18	-89	-150
	北諏訪	1,710	-4.9%	-8	-26	-55
	保倉	2,368	-5.6%	-13	-28	-100
	高士	1,632	-5.9%	-19	-19	-65
	諏訪	1,073	-7.7%	100	-9	-180
中山間地域 (面積の大半を中山間 地域が占める地区)	板倉	7,671	-1.9%	43	14	-203
	清里	3,154	-3.0%	-5	-15	-77
	浦川原	3,881	-6.9%	-63	-131	-95
	柿崎	10,990	-7.0%	-200	-207	-417
	中郷	4,527	-7.8%	-63	-191	-130
	吉川	4,988	-8.1%	-146	-112	-182
	名立	3,018	-8.4%	-74	-75	-126
	谷浜・桑取	1,948	-9.5%	-72	-44	-89
	牧	2,426	-11.7%	-105	-55	-163
	安塚	3,020	-13.6%	-209	-89	-176
大島	2,019	-13.8%	-109	-52	-163	
上越市全体		206,568	-2.3%	0	-2,581	-2,294

今回の説明対象

資料) 上越市住民基本台帳人口及び外国人登録人口をもとに作成  
備考)

- \* 1 地区は地域自治区のことを指す。ただし、「直江津」と「五智」(いずれも直江津区)は人口移動の傾向が異なるため分離した。
- \* 2 ここでの地域自治区別人口は町丁字単位で算出しているため、行政区単位での集計値とは若干異なる。また、増減内訳については、分類不明データがあるため現実の値は若干異なる可能性がある。

今回のコラムでは、このうち市内地区間の移動を取り上げ、概略を説明します。

### ■ 市内地区間の人口移動（主な傾向）

図1は、過去5年間の移動者数を差し引き（転入者数－転出者数）し、そのうち一定割合を超える動きを矢印で示したものです。この図からは、次のような傾向を見ることができます【図2】。

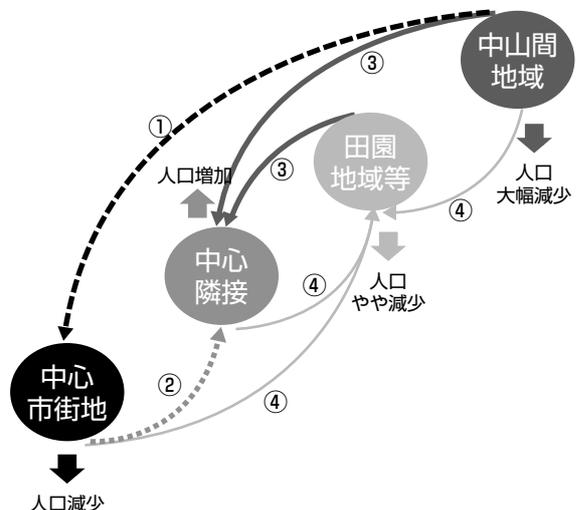
- ① 中山間地域等から中心市街地へ  
例) ・安塚 ⇒高田 (25人)  
・大島 ⇒高田 (16人)  
・谷浜・桑取 ⇒高田 (15人)

- ② 中心市街地から中心市街地隣接地域へ  
例) ・高田 ⇒金谷 (242人)、新道 (161人)  
・直江津 ⇒春日 (81人)、五智 (52人)

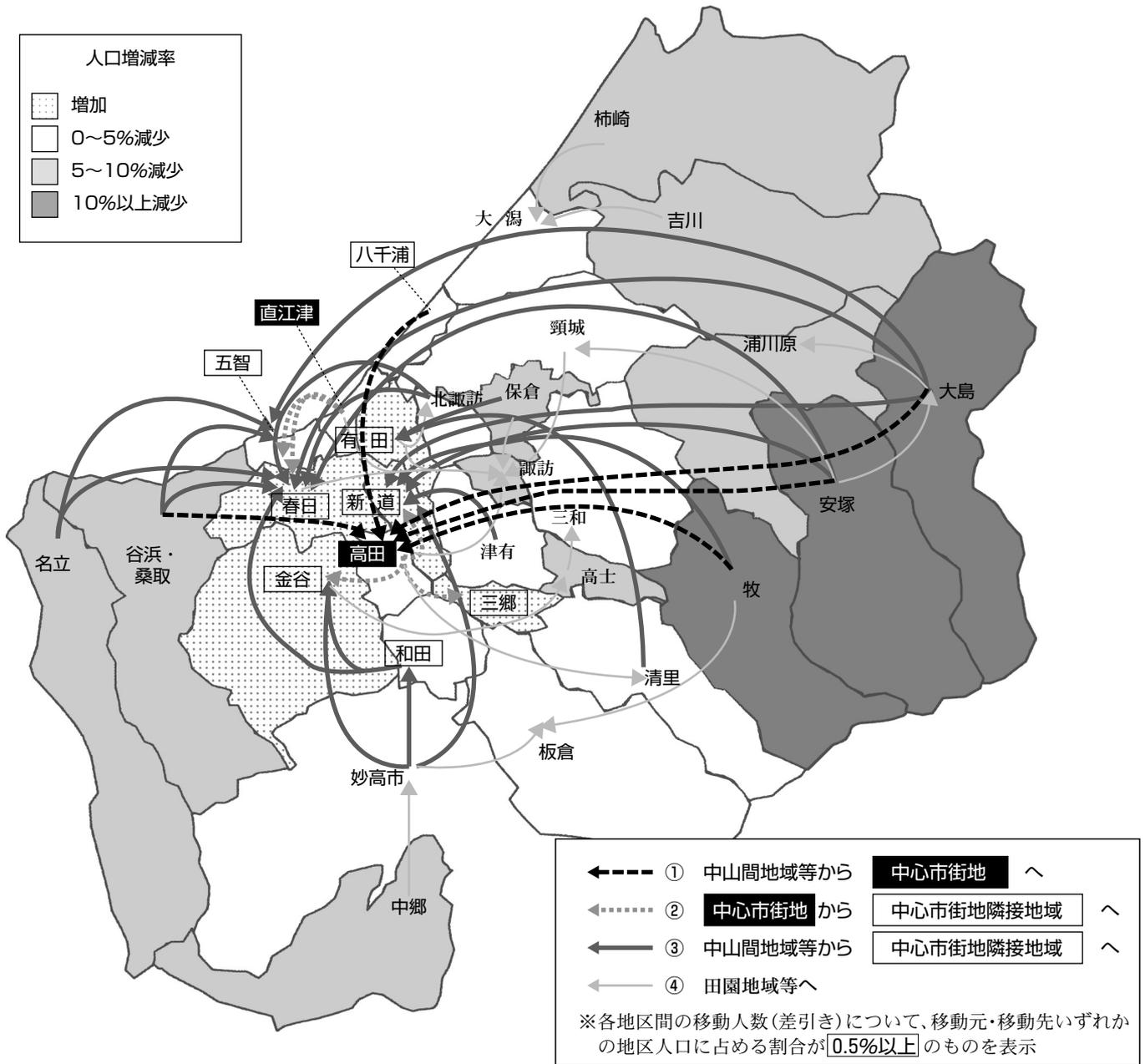
- ③ 中山間地域等から中心市街地隣接地域へ  
例) ・谷浜・桑取 ⇒五智 (32人)  
・牧 ⇒新道 (29人)  
・安塚 ⇒春日 (24人)

※ ( ) 内の人数は、差し引き人数

このほかに中山間地域や中心市街地から新興住宅地や特別養護老人ホームがある田園地域等への移動(④)なども見られます。



【図2 市内地区間の人口移動（イメージ）】



【図1 上越市における地区間の人口移動 (H17.10-H22.9)】

資料) 上越市住民基本台帳人口及び外国人登録人口をもとに創造行政研究所作成  
備考) 上越市の地域自治区別データに妙高市のデータを加えた。その他、【表1】の備考\*1、\*2と同様。

■ **持続可能なまちづくりに向けて**

市内地区間の人口移動は、若年層の一人暮らし、結婚等に伴うマイホームの取得、高齢者のマンション・福祉施設等への入居など、「住まい方」に起因するものが多いと推察されます。

このような動きの大部分は、この地域で長きにわたり続いてきたものですが、今後は傾向が変わることも推測されます。例えば、各地区の年齢構成や住宅地・生活利便施設の開発動向が変われば、人口移動の傾向も変化します。その傾向の変化は、年齢や世帯構成が偏っている地区ほど顕著に表れ、これまで転入超過が続いた地区でもいずれは転出超過に転する可能性があります。

まちづくりと人口移動は相互に影響を及ぼします。便利で安心して生活できるインフラ・施設などの環境整備が進んだ地区には人が集まる一方、人口増減が大きい地区には新たな環境整備が必要になるからです。

右肩上がりの時代には、人口移動の結果に合わせた環境整備を行うことができました。しかし、これからの時代は、人口減少や厳しい財政状況が続く中で、地域経済やコミュニティの活性化、防災、環境保全などの様々な課題にも対応しなければならず、これまでのような環境整備を続けることはできません。これらの課題を克服した「持続可能」で住みよいまちを目指し、人口移動と環境整備の在り方を考えていく必要があります。(吉村)

# 平成23年度研究計画 .....

上越市創造行政研究所では、上越市のまちづくりが抱える様々な重要課題の中でも、将来を見据えて今から取り組むべきもの、特定分野での対症療法ではなく抜本的な原因療法が必要なもの、皆で知恵を出し合って総合的に検討する必要があるものなどについて調査研究を行い、課題の整理や取組の提案などを行っています。今年度は、市町村合併後のまちづくり、北陸新幹線延伸、次期総合計画策定などの節目を意識しながら、現段階で検討すべきと考えられる次のような課題に取り組みます。

## 調査研究（分野別）

### ● 持続可能な経済・財政運営に向けた調査研究



当市の地域経済構造を把握し、一定の人口を確保できる雇用環境を生み出すための課題を整理します。また、将来の財政状況を考慮し、抜本的に取り組むべき課題を整理します。

### ● 市民主体のまちづくりに関する調査研究



まちづくりにおける市民と行政の効果的な役割分担や連携の在り方について整理し、当市の地域自治制度などをいかした市民主体のまちづくりの推進方策について検討します。

### ● 持続可能な都市構造の構築に向けた調査研究



今後人口減少や財政難などが予想される中でも住みやすい都市機能の配置や人口分布の在り方などを整理し、その実現に向けた課題や方策について検討します。

## 調査研究（総合的）

### ● 市町村合併によるまちづくりの検証



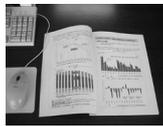
市町村合併後6年強を経過した今、当市の合併の原点に立ち返って合併によるまちづくりの在り方を整理し、その達成状況や今後の課題について検証します。

### ● 「すこやかなまち」づくりの推進に向けた調査研究



市政運営の方針である「すこやかなまち」づくりの推進に向けた検討課題を整理します。

### ● 政策形成のためのデータベースの構築



人口データを中心に政策形成に役立つデータベースを構築し、分析結果の解説等を行うことによって、効果的・効率的な政策形成を支援します。

調査研究（分野別）と調査研究（総合的）は、相互に関連させながら進めていきます。

これらの調査研究内容は報告書として取りまとめるほか、市職員や市民を対象とした学習会の開催、ニュースレターの発行（年4回予定）、ホームページでの発信などを通じて研究交流や情報発信を行い、市政の重要課題の解決や政策形成能力の向上に貢献していきます。

# 前回ニュースレターのアンケート結果から .....



No.21（特集「関係性を地域の力に」）に対し、皆様から数多くのご意見・ご感想をお寄せいただきありがとうございました。一部をご紹介します。

- ▶ これまでの頭の中が整理できた。
- ▶ 具体的な取組をイメージしやすい内容だった。
- ▶ 学校の教員をしているが、「関係性」はこの国の有り様を再考する上で極めて重要な視点だと思う。
- ▶ 病気に苦しむ方々と接する仕事の中で関係性の重要さは痛感。孤立している点と点をどうしたら線や面にできるか、「関係性を地域の力に」をもっと議論すべき。
- ▶ 行政職員の皆さんには、この内容を踏まえもっと机を離れて現場に出る動きをしてほしい。地域のリーダーとして良い意味で馬鹿になってほしい。

- ▶ 一般論ではなくまちづくりの成功例、上越市ならではの視点を提示してほしい。
- ▶ 言っていることは概ね理解できるが、現実の取組となると非常に難しい。各団体の中で話し合いはできても、外に声を出して輪を広げるには様々な制約がある。個人情報保護の中でどう取り組むのか。
- ▶ すこやかなまちづくりや関係性の再構築、信頼ある行政の構築などが挙げられているが、行政への不信任はまだある。
- ▶ コンパクトで扱いやすく、情報の質・量も良い。
- ▶ 文字が読みにくい。あれもこれも欲張らず、市民が読みやすいように工夫してほしい。
- ▶ レターのみでなくメディアを活用して議論の場を作るなど、存在を身近なものにしてほしい。

今回賛否両論の意見をいただきました。読みづらいところのご指摘や伝え切れなかった点は今後の反省点といたします。内容についてはまちづくりの本質であり、一般論にはとどまらないと考えますので、今後も具体例を交えニュースレターや様々な機会をとらえ、お伝えできればと思います。



上越市創造行政研究所  
活動報告書2000-2009  
を発行しました

平成12年4月に当研究所が設置されてから10年間の業務を総括し、今後の方向性を考える機会とするため、この間の活動概要等を取りまとめた報告書を作成しました。報告書は研究所のホームページからダウンロードできます。冊子をご希望の方はご一報ください（部数に限りがございます）。

## 編集後記

今年度のニュースレターは、年4回の発行を予定しています。構成の見直しも行い、「まちづくりコラム」や「データでみる上越」の充実を図りましたが、いかがでしたでしょうか。この4月に研究所のメンバーが代わりましたが、今後ともより良いまちづくりに向けた考え方や情報の発信に努めてまいります。是非ご意見・ご感想をお寄せください。【編集：大友】

## 上越市創造行政研究所ニュースレター 「創造行政」 No.22 Jun. 2011

発行：上越市創造行政研究所  
〒943-8601 新潟県上越市木田1-1-3 上越市役所第2庁舎  
TEL:025-526-5111 FAX:025-524-6105  
E-mail:souzou@city.joetsu.lg.jp  
URL:http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/souzou-gyosei/

ニュースレターは木田庁舎1階市政情報コーナー、各総合事務所でも閲覧可能です。また、当研究所のホームページにも掲載しています。